



赤十字国際ニュース

日本赤十字社 事業局 国際部

〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3

電話：03-3437-7087

FAX：03-3435-8509

E-mail：kokusai@jrc.or.jp

URL：<http://www.jrc.or.jp/>

2009年 第9号 2009年 3月 27日

(通巻 第735号)



ミャンマーサイクロン復興支援：エヤワディ川の風③

死者行方不明者 13 万人以上、被災者 240 万人という、大きな被害をもたらしたサイクロン・ナルギス発生から 10 ヶ月。ミャンマーでは、住民の努力と国内外からの支援により、さまざまな分野の復興支援活動が続いています。ミャンマー赤十字社も、引き続き被災地において、研修を受けたボランティアや国際赤十字スタッフとともに、生計再建、保健衛生、シェルター、防災対策などの活動を進めています。

本号では、本年 2 月に被災地を視察した日本赤十字社・ミャンマー復興支援担当者(本社国際部国際救援課) から、現地報告をお伝えします。

■倒壊した小学校 —高潮と強風の被害—



上：倒壊した小学校（ボガレー郡）
下：仮設校舎で勉強する子どもたち（同上）
©日本赤十字社



サイクロン・ナルギスでは、4,000 校以上の学校が倒壊あるいは部分的に損害を受け、いまだに被災地であるデルタ地域では、多くの小学校再建が必要とされています。強風のため屋根が吹き飛ばされ、中には、5~7メートルの高潮（高波）が襲い、校舎が倒壊してしまうところもありました。

サイクロンがエヤワディ管区を襲ってからすでに 10 ヶ月が経過し、一見人々の生活は元に戻ったような印象を受けます。学校に通う子どもたちはとても元気で、授業中にお邪魔した私たちのために歌を披露してくれたり、元気よく質問に答えてくれたり、かわいらしい笑顔がたくさん見せてくれました。しかし、子どもたちを取り巻く環境は依然厳しいままです。いまだに仮設校舎で勉強を続ける日が続く、風通しの悪いテントの仮設校舎では、熱中症にかかる子どもも少なくありません。また、自身が被災したのはもちろんのこと、家族や友人など近しい人を失った子どもたちも多くいることから、まだまだ精神的なサポートも必要なことが容易に想像できまし

た。

復興支援活動の一つである生活再建事業では、CFW（キャッシュ・ワーク）事業¹の第1期が終了し、約3,000世帯に支援することができました。現在は第2期が始まっています。また今年からは、日本赤十字社と協働して、小学校の再建事業を実施することが決まりました。この事業では、トタン屋根・平屋造りの標準的な小学校に加え、被災状況に応じてサイクロンシェルターの機能を兼ねた鉄筋コンクリート造りの小学校も建設します。これは、将来起こりうる災害に備え、サイクロンシェルターが近くにあることで、住民が安心して日常生活を送れるようになるためです。子どもたちが笑顔で学校に通い、平穏に生活できる環境を早く整えたいと思わずにはられません。



CFW 事業：住民が協働して道路補修など村のインフラ整備を実施 ©IFRC

■困難なアクセス

エヤワディ管区は、地図で見るとよりもずっと細かい川が入り組んでいて、それはまるで毛細血管のようです。この川で船をこぎ、住民は生活を営んでいます。日本の子どもたちが自転車をこぐように、船をこいで学校まで通う子もいます。川は、人々が生活をする上でなくてはならないライフラインとなっていますが、潮の干満があり、人の移動や物の運搬の交通手段としては、ときに多くの時間を要するだけでなく、雨季には洪水が起こるなど、危険をとまなうこともあります。

災害発生からこれまで赤十字は、川幅が狭くエンジン付の船が入れないところでは、手こぎの船で進むなどして、できる限り多くの人々に支援の手が届くように事業を進めてきました。今年から始まる小学校建設事業においても、日赤はもっともアクセスが困難だといわれるモウラマインジュン郡において、一番多い16校の学校建設を予定しています。



船は主要交通機関（中央はミャンマー赤十字社の「ナルギス1号」） ©日本赤十字社

チャイラット郡では、川の潮が満ちるのを待ってボートで帰路につきました。焼けるような夕日が沈む夕暮れの中で、エヤワディ川の心地よい風を受けながら、河岸では人々が漁業網を片付け、水浴びをし、一日がゆっくりと終わろうとしていました。被災地のすべての人々が心から平和だと思える日常を送れるように、赤十字は支援を続けていきます。

¹ CFW(Cash For Work)：住民自身が生活を再建するために、収入の機会を提供する事業。村のインフラ整備活動等に参加することで、住民は現金収入が得られる。